

茶器 平野肩衝 一口 附 目録並附属品

【所在地】鹿児島市吉野町 9698 - 1 尚古集成館

【種別】県指定有形文化財（工芸品）

【指定年月日】昭和 55 年 3 月 31 日



平野肩衝は、漢作唐物・大名物の茶入。高さ 8.7cm，胴径 8.0cm，口径 4.1cm と，茶入としてはやや大ぶりで，口縁部のひねり返しは深い。胴部には同一間隔で縦にへら跡が 6 筋みられ，底部は板起こしで中央部がやや高くなっている。天正年間（1573 ～ 1592 年）に河内国の町人平野道是が所持していたところからこの名がある。なお肩衝とは，茶入の形態の一つで，文字通り肩の部分角張っているところに特徴がある。また漢作唐物とは，宋代から元代（10 ～ 14 世紀）にかけて造られた中国産の茶入（唐物）のなかでも，作風・土質が一段と優れたものことで，大名物とは名物帳などに記載されて著名な作品（名物）のなかで，千利休登場以前から特に著名であったものをさす。

文禄 4（1595）年，島津義弘が豊臣秀吉から文禄の役の恩賞としてこの茶入を与えられ，以後，島津家の重物（家宝）として受け継がれてきた。この間，慶長 5（1600）年の関ヶ原合戦の後，義弘夫人がこの茶入を懐に忍ばせて大坂から脱出，寛永 7（1630）年の將軍家光と大御所秀忠が江戸桜田藩邸に御成した際には，藩主家久がこの茶入を使って供応したというエピソードもある。また，享保 16（1731）年，桜田藩邸で火災に遭い破損したが，漆を使って修復された。

象牙製の蓋一枚，白羽二重の御物袋・鈍子の袋・黒塗挽家などが付随する。